

◎ 霊人体の善なる正常的な成長のために

① 生心の要求のままに肉心が呼応

② 生心が指向する目的に従って、**肉身が動く**

肉身は霊人体から生霊要素を受けて善化

それに従って、肉身は良い**生力要素を霊人体に与える**

常に霊人体に与えられている生素（神の愛）

「信仰基台」(外的)

(体を動かす)

「実体基台」(内的)

(霊人体の成長・人格の形成)

※ 創造本然の立場からの視点

神様：成長期間は間接主管圏なので、直接主管できない。但し、原理のみ言を与えたのち、その結果を見て主管できる。(原理結果主管圏)

人間：み言を与えられたのちは、神の干渉なしに、ただ本心の自由（自由意思＋自由行動）によって、その命令を守る。

人間が実践：霊人体が成長し、与えられたみ言通りの人格を表すようになる。

⇒ 神を一層喜ばせ、神との心情関係も深まることに

神様の心情：人間が、自分自身の責任分担として、そのみ言を信じ、自ら完成することによって、神の創造性に似るようにし、万物に対する主管性を持つようにするため

◎ 真理

生心の要求するものが何であることを教えてくれるのが真理

① 人間が真理で生心が要求するものを悟り、

② **そのとおりに実践**することによって、人間の責任分担を完遂

生霊要素と生力要素とがお互いに善の目的のための授受作用をするように。

⇒ **霊人体の正常的な成長へと連結**

◎ 神霊と真理(終末論第五節(一)より)

① 神霊：無形世界に関する事実が、霊的の五官によって霊人体に霊的に認識されてのち、これが再び肉的五官に共鳴して、生理的に認識

② 真理：有形世界から、直接、人間の生理的な感覚器官を通して認識

ニュートン(万有引力)、天動説⇒地動説

◎ 終末期の環境(終末論第五節(二)より)

新しい時代の摂理は、古い時代を完全に清算した基台の上で始まるのではなく、古い時代の終末期の環境の中で芽生えて成長するのであるから、その時代に対しては、あくまでも対立的なものとして現れる。

◎ 終末に処している現代人(終末論第五節(二)より)

① 何よりもまず、**謙遜な心をもって行う祈り**を通じて、神霊的なものを感得し得るよう努力しなければならない

② **因習的な観念にとらわれず**、我々は我々の体を神霊に呼応させることによって、新しい時代の摂理へと導いてくれる**新しい真理を探し求め**なければならない。

③ 探したその真理が、果たして自分の体の内で神霊と一つになり、**真の天的な喜びを、心霊の深いところから感ずる**ようにしてくれるかどうかを**確認**しなければならない。